**Chapter 6：蒸気と氷、シャワーズの第一印象**

学校生活に戻ったブースターは、進化したばかりの新しい姿と、制服の長ズボンに半開きのジャケットにまだ慣れていなかった。体温の制御がうまくいかず、ほとんどのクラスメートは彼を避けていた……あるいは安全な距離から密かに見つめていた。

ただ一匹、**シャワーズ**だけは違った。

プリーツスカートを揺らし、彼の隣に座り、尾をゆらりと動かして――静かな湖のように落ち着いていた。

「やっほ。あんた、あのデカい虫を焼いた子でしょ？」  
彼女は気だるそうに訊いた。

「え、うん……？」

「あたし、シャワーズ。暇なら一緒にどう？」

ブースターはまばたきをした。彼の体毛が緊張でパチパチとはぜた。

数日後、ブースターはシャワーズの家を訪れた。そこは不思議な空間だった――青々と茂る庭と、凍てつく壁が共存する家。

シャワーズの両親はというと……

* **リーフィア（父）**：過保護で土臭く、常に枝を剪定している
* **グレイシア（母）**：気品あるが冷徹な目を持ち、声には氷柱のような冷たさが宿っていた

ブースターが玄関をくぐった瞬間、室温が急上昇。氷から蒸気が立ち、花は少し萎れた。

リーフィアが目を細めた。「……焦げ臭いな。」

グレイシアが一息吐いた。白い霧が空気を凍らせる。「まるで壊れたサウナね。」

シャワーズはただニコニコと笑いながら、ブースターの前足を引いて家の奥へと連れて行った。  
「気にしないで。あいつら、ほのおタイプに出会うたびに必ず何か言うから。」

裏庭でオレンスムージーを飲んでいた時のこと。

突然、空を裂くような叫び声が響いた。

――**ファイアロー**が、ボロボロの姿でパティオに突っ込んできた。

「これは強盗だァァ！　ベリーよこせェェッ！！」

ブースターが反応する前に、シャワーズのまなざしが一切揺れずに返した。

「やだ。」

「はァ！？」

彼女は無言で立ち上がり、水の波動をチャージし、そのまま**ファイアローを雪山へ撃ち込んだ**。

「もう一回やったら、あんたの翼凍らせてホウオウ呼ぶわよ。」

ファイアローはガタガタ震えながら、盗んだコインの袋を落とし、「ごめんなさぁぁぁい！！」と叫びながら逃げ去った。

ブースターは呆然と見ていた。

シャワーズがやわらかく微笑みながら振り向く。

「ごめんね。びっくりしたでしょ？　大丈夫？」

ブースターはゆっくりとうなずいた。「……君、めちゃくちゃ怖いね。」

「よく言われる。」

家の中へ戻るその背中――後ろでは蒸気と霜が静かにせめぎ合っていた。

ブースターは心の中で、そっと思った。

**「……彼女は、絶対怒らせちゃいけない。」**